別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

負傷競技者のスポーツ傷害受容に関する研究

氏 名

辰巳 智則

論 文 内 容 の 要 旨

スポーツ傷害は、アスリートの身体のみならず心をも傷つける重大な出来事である。そのため、競技復帰に向けた負傷アスリートの心の回復やリハビリテーションへの専心性に関わる要因、ならびに、負傷アスリートへの有効な支援方法を明らかにすることが必要である。そこで本研究では、負傷アスリートの心の回復やリハビリテーションへの専心性に関わる中核的要因として「スポーツ傷害受容」に着目し、その構造を明らかにする。そして、受容に影響する環境変数として重要な他者によるソーシャル・サポートを、個人差変数として負傷アスリートによる情動調整行動を取り上げ、変数間の関連を検討し、心理支援に関する示唆を得ることを目的とした。

第1章では、スポーツ受傷後の心理的適応に関する先行研究を概観し、「スポーツ傷害受容」を中核に据えた研究の意義及び研究遂行上の問題点を指摘した。その問題点は、①受容の定義が曖昧であり、研究と支援の双方の面から課題を残していること、②重要な他者によるソーシャル・サポートが負傷アスリートの陰性情動の低減や受容に寄与することを明らかにしてきたが、陰性情動の増減は、主体が行う情動調整による影響を受けるため、ソーシャル・サポートと個人の情動調整行動を同時に仮定する必要があること、であった。次に、以上の問題点の指摘を受け、スポーツ傷害受容を「負傷アスリートがスポーツ傷害の過酷さを認識しながらも、気持ちの折合いをつけ、状況を克服するために今やるべきことは何か、先にやるべきことは何であるのかを自ら見出だし、対処していこうとする心理状態」と定義し、ソーシャル・サポートと情動調整行動を受容の調節変数とする視点について、競技スポーツの社会的・文化的側面をふまえて説明した。そして最後に本論文の目的を述べた。

第2章では、まず、スポーツ傷害受容を予測する観点の抽出を目的とし、学生時代に有

力な運動部に所属していた元負傷アスリート4名を対象に受傷からリハビリテーション、競技復帰に至るプロセスについての半構造化面接を行った。その結果、スポーツ傷害受容の基軸には「脱執心的対処：負傷がもたらす負の影響への執着から脱することを可能にした心性」の観点が位置づき、これに先行して「情緒的安定性」と「時間的展望」及び「所属運動部一体感」といった心理社会的回復の観点が認められることが示唆された【研究Ⅰ】。次に、脱執心的対処の観点からスポーツ傷害受容尺度（AIPA-S）を作成し、因子を検討した結果、スポーツ傷害受容が「現状随順性：負傷の現状に折り合いがつけられている心性」と「自己努力における意図性：自らが行う対処努力に一貫した意図が備えられている心性」の2つの下位因子からなり、リハビリテーション専心性及びリハビリテーション生活に関する時間的展望と正の関連にあることが明らかにされた【研究Ⅱ】。このようにスポーツ傷害受容はリハビリテーションを促進することが明らかにされたが、リハビリテーションに続く競技復帰後の様態にも影響することが予測された。

そこで、第3章では、負傷アスリートのリハビリテーション期におけるスポーツ傷害受容とリハビリテーション専心性及び復帰時のリハビリテーション成果（傷害の治癒、競技種目動作の回復及び自己成長感）に関する認知度と競技復帰後の適応との関連を検討した。その結果、競技復帰後の適応が良好なアスリートはそうでないアスリートよりも、リハビリテーション期のスポーツ傷害受容やリハビリテーション専心性の程度が高く、競技復帰時には自己成長感と競技種目動作の回復を強く認知していた。以上の結果は、リハビリテーション期におけるスポーツ傷害受容の程度が競技復帰後の適応状態を予測することを示唆することから、スポーツ傷害受容を心理支援の方向目標として位置づけることが妥当であることが考えられた【研究Ⅲ】。

第4章では、第2章【研究Ⅰ，Ⅱ】の結果をふまえ、スポーツ傷害受容を促進させる「心理社会的回復要因」、すなわち受容の先行因を検討した。その結果、特に「情緒的安定性」と「時間的展望」に関する心理社会的回復要因がスポーツ傷害受容の促進要因（先行因）であることが明らかにされ、これらの心理社会的回復要因がスポーツ傷害受容に及ぼす影響過程を「スポーツ傷害受容の心理プロセス」と命名した。また、以上の結果より、情緒的安定性の回復を意図した「情緒的支援」や時間的展望の回復を意図した「見通し支援」がスポーツ傷害受容に有効であると考えられた【研究Ⅳ】。

第5章では、まず、重要な他者による「ソーシャル・サポート」と負傷アスリートが陰性情動に対して行使している「情動調整行動」を「スポーツ傷害受容の心理プロセス」を調節する環境変数及び個人差変数とそれぞれ仮定し、変数間の関連を量的に検討した。取り上げた情動調節行動は「情動表出」と「情動表出の抑制」及び「肯定的再解釈」の3つであった。検討の結果、ソーシャル・サポートの認知度が高い負傷アスリートは、陰性情動を表出することで、情緒的安定性を回復させ、受容を促進させていることが示唆された。一方、ソーシャル・サポートの認知度が低い負傷アスリートは、陰性情動の表出を抑制することで、情緒的安定性を低下させ、受容を阻害させていることが示唆された反面、時間

的展望の回復を促し、受容を促進させていることも示唆された。以上の通り、負傷アスリートによるサポート認知度の違いにより、行使される情動調整行動とスポーツ傷害受容の心理プロセスのパターン（関連性）が異なることが明らかにされた【研究V】。なお、ソーシャル・サポートと情動調整行動及びスポーツ傷害受容の心理プロセスに関する変数間の関連は、単方向で捉えるだけでなく、双方向の因果性や相互循環を仮定する方が負傷アスリートの実態に即している。そこで引き続き、負傷から競技復帰へと至る間のこれらの変数間の関連の時系列的変化を明らかにすることを目的とした質的研究を行った。元負傷アスリート1名を対象に半構造化面接を行い、語りの内容に基づいて変数間の関連を縦断的に検討した結果、まず、研究Vで示された関連、つまりソーシャル・サポートが情動調整行動に影響し、情動調整行動がスポーツ傷害受容の心理プロセスに影響するといった因果性が確認された。ただし他方では、負傷アスリートによる情動表出が重要な他者によるソーシャル・サポートの実行を引き出すという、ソーシャル・サポートと情動調整行動の双方向の因果的作用も認められた。また、ソーシャル・サポートの介在の有無により、受容に影響する情動調整行動に相違がみられただけでなく、負傷—競技復帰間における時期の違いにより、受容に影響する情動調整行動が異なることも明らかとなり、時期と情動調整行動の質を加味した支援が有効であることが示唆された【研究VI】。

第6章では、まず、本論文の各章で得られた知見と意義を述べた上、本論文の総括的な結論及び心理支援に関する示唆に言及した。本論文では、脱執心的対処の観点からスポーツ傷害受容を捉え、当該心性が「現状随順性」と「自己努力における意図性」の2つの要因からなり、「重要な他者によるソーシャル・サポート」と「時期（時間）」ならびに「負傷アスリートが行使する情動調整行動」の3つの要因がスポーツ傷害受容に影響すると結論づけられた。そしてこの結論をふまえ、「ソーシャル・サポート」と「時期」及び「情動調整行動」の3つの視点から、2段階・4局面からなる「スポーツ傷害受容のプロセスモデル」を提示した。第1段階は、陰性情動の顕在化と表出を特徴とする「ショック・否認局面」と陰性情動の表出抑制と潜在化を特徴とする「混乱と抑鬱局面」が含まれる。この段階で有効な支援は、情緒的安定性の回復に焦点をおいた「情緒的支援」であり、行動変容を求めるような支援は避け、陰性情動の表出を支える支援が有効と考えられた。第2段階は、肯定的再解釈と自己統制を特徴とする「受容局面」と「後受容局面」が含まれ、過去（負傷以前）の自己を現在の自己に統合していくことが課題となる。この段階にある負傷アスリートは、事態全体を正視することが可能となっているため、彼らに対して有効な支援は、時間的展望の回復に焦点を置いた「見通し支援（目標設定や目標関与を高められるような支援）」であると考えられた。最後に、今後の課題として、介入的な実践研究や複数事例に基づく検討の必要性などに言及した。